令和８年度　核兵器廃絶平和都市宣言事業

「中学生による被爆地訪問事業」

文　集



会津若松市

は　じ　め　に

会津若松市は、昭和60年８月６日に、日本国憲法の平和精神に基づき、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため、「核兵器廃絶平和都市」を宣言いたしました。以来、「広島市から被爆体験者等を招いての被爆体験講話」や「広島・長崎原爆被災パネル展」を開催するなど、様々な事業を実施しています。

この事業の一環として、市内中学生の代表による被爆地広島市の訪問を実施しました。

広島平和記念公園や広島平和記念資料館の見学、「第２回全国平和学習の集い」での被爆体験講話及びグループディスカッションへの参加、さらには平和記念式典への参列などを通して、戦争や原爆がもたらした深い悲しみと癒えることのない心の傷を真摯に受け止め、命の尊さや平和への願いを心に刻みました。

その想いを感想文としてまとめましたのでご覧ください。

核兵器廃絶平和都市宣言

核実験、核兵器の使用が人類を破滅に導くことは必至であり、その唯一最大被害者たる日本国民は凄惨な原爆災痕を世界各国に認識せしめてきたのである。

しかしながら、今日なお世界の動きは、核兵器の製造、実験が繰りかえされ、国際情勢も極度に緊張を加え、核戦争の危機をはらんでいることはまことに憂慮すべきことである。

私たちはこのような、人類を脅かす核実験、核戦争の禁止を求め人類の幸福と平和を念願するものである。

ここに会津若松市は日本国憲法の平和精神に基づいて、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため「核兵器廃絶平和都市」であることを宣言する。

昭和60年８月６日　会津若松市

目　次

「被爆者が願う平和のために」　１頁

話し合うことから始まる平和　２頁

広島訪問を通して　３～４頁

広島で得た学び　５頁

「平和とは何か」　６頁

当たり前の日常　７～８頁

広島訪問から感じて学んだこと　９～10頁

被爆地訪問事業を通して　11頁

広島訪問に参加し感じたこと　12頁

広島訪問を通して感じたこと　13～14頁

広島訪問を通して　15～16頁

平和をつなぐために　17頁

非核化に向けてできること　18頁

「被爆者が願う平和のために」

今回、市内の中学生十三名で「被爆地訪問事業」として広島に行って参りました。授業で原爆について学んできましたが、実際に広島を訪れ、自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じることで教科書だけでは分からないことがたくさんあると感じました。その中でも特に心に残ったことが二つあります。

一つ目は、平和記念資料館や平和記念公園での見学です。資料館では、原爆による火傷を負った人々の写真や当時の人々が描いた絵を見ました。突然、異様な閃光に包まれ、何が起こったのかも分からないまま多くの人の命が奪われたという言葉がとても印象に残っています。「声をたてず黙々と郊外へ逃げて行く」や「衣服は引き裂け皮膚はただれさがる」という言葉とともに描かれた絵から、当時の悲惨な状況が伝わってきました。その展示を見て、自分の心臓を誰かに掴まれたような感覚になりました。また、広島が核兵器の実験の対象とされたことを知り、とても悔しい気持ちになりました。そして平和の鐘、原爆の子の像、平和の灯などについても建てられた理由や込められた願いを教えていただき平和への思いを強く感じました。

二つ目は被爆者の宇佐美節子さんから直接お話を聞けたことです。宇佐美さんは、被爆者であることを理由に、結婚することが難しかったというお話も聞きました。実際に宇佐美さん本人からお話を聞いたことで、原爆はその時だけではなく、その後の人生にも大きな影響を与えるのだと強く感じました。質疑応答では、戦時中だけではなく、戦後の生活についても詳しく教えていただきました。

今回の訪問では十三名で声を掛け合い、協力しながら行動し、仲間と有意義な時間を過ごすことができました。広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを学校や地域の人にも伝えていきたいです。そして、宇佐美さんがおっしゃっていた「平和」に一歩でも近づけるよう行動していきたいと思います。

話し合うことから始まる平和

広島訪問事業で被爆者の方から当時の体験についてのお話を聞き、戦争が人々の生活や心にどれほど大きな影響を与えたのかを知りました。特に印象に残ったのは、被爆した当時はまだ幼かったにもかかわらず、何十年も経った今でも、その時の記憶を鮮明に覚えているということです。それほどまでに、当時の出来事が心に深く刻まれるものだったのだと思いました。被爆者の方のお話を聞き、二度と戦争を起こさないために、私たちに何ができるのかを考えました。

グループディスカッションでは、「平和を実現するためには、どのようなことをすればよいか」について話し合いました。相手の意見を尊重することや、問題を話し合いで解決するなど、様々な意見が出ました。しかし、話し合いをするためには、安心して意見を言える雰囲気や、自分から話そうとする勇気、互いの信頼関係が必要なのではないかという考えに至りました。

そして私たちは、平和につながる行動には、それを支える土台があるという結論にたどり着きました。私はこのことから、平和は国や世界だけの問題ではなく、私たちの身近な人間関係から始まるものなのだと思いました。相手を尊重することや、自分と違う考えを受け入れること、そして安心して話せる雰囲気をつくることも、平和につながる行動の一つなのだと思います。

今回のディスカッションでは、自分一人では思いつかなかった考えを、仲間の意見を聞くことで知ることができました。被爆者の方のお話を聞いて感じた「二度と戦争を起こしてはいけない」という思いを、ただ願うだけで終わらせず、まずは身近な人との関わりの中で生かしていきたいです。相手を尊重し、自分から話そうとする勇気を持つこと、そして、誰もが安心して話せる関係をつくっていくことが、私にできる平和への第一歩だと思います。

広島訪問を通して

広島の街が一瞬にして破壊されてから、八十一年後、訪問した私にとって印象に残ったことは三つありました。

一つ目は、原爆ドームです。原爆ドームはとても痛ましく、見た瞬間鳥肌が立つものでした。あの日、この中にいた全員が一瞬にして亡くなったと思うと、原爆の威力は凄まじいものだということが実感できました。

二つ目は、三歳の時に被爆体験をした宇佐美節子さんのお話です。原爆が落とされてからしばらくして表に出ると性別もわからないくらい全身大やけどをしている人が沢山いたという場面が心に残りました。私もやけどはしたことがありますが、全身の大やけどとは比べものにならないものです。当時の人達はどれだけ痛くて苦しかったか私には想像することさえ難しかったです。宇佐美さんの言葉にはあの日に対する悲しい気持ちやこれからも平和が長く続いて欲しいという思いが込められていました。

三つ目は、平和記念式での平和への誓いの一言目です。「もしも『大切なもの』が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか」この言葉が印象に残りました。家族や友達などの周りの人、温かいごはんや勉強できる環境、今送っている私達にとって当たり前の日常。それが一瞬で消える。考えたことがありません。平和な日本は今、当たり前になっているからです。しかし、私達が笑い合っている時に世界のどこかでは核兵器により、当たり前の日常が消えてしまっている人がいるという現状があります。日本は平和だから関係ないなどと思うのではなく、被爆国として核兵器がもたらした悲劇を今後も伝えていかなければならない、これが私達中学生の役目だと改めて感じました。

今回の広島訪問では戦争や原爆の恐ろしさや平和の大切さを深く学べた三日間になりました。原爆が落とされた日から八十一年経った今、被爆された方々の高齢化が進み、その平均年齢は八十七歳になろうとしています。

もう二度とそして誰もこんな悲しく辛い思いをさせない、被爆された方々の強い思いが風化しないためには、私達若い世代がこの出来事を後世に伝え続けることが

必要です。私は、この三日間で体験したことを思い出として残しておくだけではなく、原爆の実際や平和の尊さを多くの人に伝え、そのことについて考えるきっかけや平和な世界を自分達で作りあげていきたいです。

広島で得た学び

私は、今回の広島訪問で、原爆ドームや平和記念公園、資料館の見学、被爆された宇佐美さんのお話、仲間とのグループディスカッション、広島平和記念式典の参加など、とても貴重な体験をさせていただくことができました。写真で見るのと実際に自分の目や耳で見たり聴いたりするのとでは、感じ取る生々しさや言葉の重みが全く違っており、これまで教科書の中で見ていた「原爆投下」という出来事が、目の前に現実の重みを持って迫ってくるような、深い衝撃と学びを得た訪問となりました。

爆心地からわずか五百メートル圏内では、三千から四千度という想像を絶する熱線が人々を襲い、多くの普通の日常が一瞬で奪われました。その場で生き残った人々も「水をください」と叫びながら息絶えていったといいます。また、怪我が無さそうに見えた子どもたちも、放射線によって数年後や数十年後に命を落とすなど、原爆の真の恐ろしさは後障害や残留放射線にもあることを改めて知りました。さらに、被爆したこと自体が差別の対象とされた苦しみを知り、胸が締め付けられる思いでした。

しかし、広島の地で出会ったのは悲しみだけではありません。世界中から送られた折り鶴を再生紙にして作られた卒業証書や核兵器が世界から完全に無くなるまで燃やし続けられる「平和の灯」から、過去の悲劇を二度と繰り返さないという人々の強い意志を感じました。原爆ドームの永久保存が決まったのも、子どもたちの声がきっかけだったと聞き、私たちにもできることがあるのだと勇気をもらいました。

兵器を生み出したのは人間ですが、平和を創り出すことができるのも私たち人間です。相手を理解し、思いやりを持って対話を重ねることや「ありがとう」と言える日常を大切にすることが平和への第一歩だと学びました。広島で見た光景と被爆者の言葉を胸に刻み、この真実と平和の大切さを、周囲に伝えることこそが、広島を訪問した私への使命だと感じています。

「平和とは何か」

私は８月４日から６日までの３日間、広島被爆地訪問事業に参加した。平和記念式典への参列や被爆者の方の講話を聴き、多くのことを学ぶ中で、これから自分が何をしなければならないのかが見えた気がする。

最初、私は核兵器について戦争を防ぐための「抑止力」としてとらえていた。しかし広島に着いて原爆ドームを訪れると、そこには多くの観光客が集まっていた。なぜこれほど多くの人がこの場所に訪れるのだろうか。その答えは、２日目に訪れた平和記念資料館で強く実感することになった。

資料館で目にしたのは、あまりにも悲惨な町の光景だった。特に原爆病に苦しむ人々の写真を見たとき、私は胸が苦しくなり、思わず目を背けてしまった。同時に、これまで戦争をどこか遠い昔の出来事のように考えていた自分の考えの甘さを実感した。私たちが普段、当たり前のように過ごしている毎日は決して当たり前のことではない。過去に失われた多くの尊い命と、その悲劇をもう二度と起こさないという人々の強い努力の上に、ようやく成り立っているのだと実感した。

世界が平和を維持しようとしているのは、核兵器という抑止力のおかげではない。戦争の悲惨さを知り、平和を維持しようとする世界中の人々の思いがあるからだ。

講話の中で被爆者の節子さんが語った「平和とは、好きなことを好きなようにできる毎日」という言葉が深く心に残っている。今も世界では紛争が続き、本当に平和とは言えない地域もある。私にできることは少なく限られているかもしれない。しかし、広島で知ったこの苦しみと、平和の尊さを次の世代に伝えていくことはできる。それが、現地を訪れた私の使命ではないだろうか。

私たちは平和な時代に生まれた。だからこそ、この恵まれた環境に甘んじることはなく、一人ひとりが「平和とは何か」を今一度真剣に考えていくべきだと強く思っている。

当たり前の日常

７月２８日、熊本で大きな地震が発生しました。死者３８名。８月１３日、千葉で豪雨が発生しました。死者１３名。

ここ最近の自然災害で、５０名を超える方が亡くなっています。

１９４５年８月６日、広島に原子爆弾が投下されました。死者は１４万人と推計されています。これは、自然災害のような不可抗力によるものではありません。人間が作り出し、人間が起こしたことです。

私は３日間の広島訪問に行ってまいりました。そこで私は、今まで味わったことのない衝撃を受けました。広島の象徴としてそびえたつ原爆ドーム。その周りの公園には、今も亡くなった方の骨が埋まっているそうです。その上を、私たちは今、幸せな気持ちで歩いている。そう考えると、私は体の芯がビリビリと震えるのを感じ、強く地面を踏みしめて歩いていました。ここを幸せな気持ちで歩けることは、恵まれていることなのだ。これからもずっと、こうやって歩いていきたい。そう思うことができたからです。

資料館では、嘘のように残酷な写真の数々を目にしました。どれも非現実的で、私はその写真にシャッターを切ることができませんでした。そこで初めて、原子爆弾の力を実感しました。

原子爆弾は、このような非現実的な状況を生み出します。この脅威が世界中に存在している以上、いつかまた同じことが起こってしまうかもしれない。それは、いつ、どこで、誰に起こるかわかりません。広島訪問を通して、今の世界は、まだ完全に平和だとは言い切れないのだと感じました。

被爆体験者の宇佐美さんは、「笑顔でいることが平和だ」とおっしゃっていました。原子爆弾が投下される前の広島には、戦争中であっても当たり前の日常があり、そこには小さな笑顔があったのではないかと思います。

一人一人が日常の小さな幸せを大切にすることが、平和につながるのではないかと私は考えます。過去を変えることはできません。けれど、私たちは未来を変えていくことができます。唯一の戦争被爆国である日本に生まれた私たちがやるべきこ

とは、原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さを伝えていくこと。そして、日常の小さな幸せを大切にしながら、笑顔で毎日を過ごしていくことです。

　広島訪問は、平和について深く考える３日間となりました。広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを忘れずに、これからも生きていきたいと強く思いました。

とは、原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さを伝えていくこと。そして、日常の小さな幸せを大切にしながら、笑顔で毎日を過ごしていくことです。

　広島訪問は、平和について深く考える３日間となりました。広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを忘れずに、これからも生きていきたいと強く思いました。

広島訪問から感じて学んだこと

一九四五年八月六日、広島に原爆が落とされた。人の体は全身焼け、建物は吹き飛んだ。上空には巨大なキノコ雲ができて黒い雨が降った。放射線で、多くの人が苦しみ、命を落とした。そして、今でも原爆症で苦しんでいる方がたくさんいる。

あれから八十一年が経ち、私たちは当たり前のように毎日の生活を安心して暮らせている。

会津若松市は、核兵器廃絶平和都市を宣言し毎年被爆地、広島・長崎を訪問する事業を行っていて、今年は私も参加する機会を得た。この三日間は私にとって何にもかえがたいものになった。

一日目、原爆ドームを訪れた。ドームの中には入れなかったが、その当時の瓦礫はそのまま残っていた。私は奇跡だと感じた。それは多くの方が未来へ残そうと保存したことに他ならない。ここに多くの人の思いを感じた。

二日目、記念館を訪れ、午後は被爆体験者のお話を聞いた。原爆の破壊力とその後の後遺症。さらにその後の被爆者への差別的な態度。一つ一つが過酷で残酷なもので、思わず目をおおいたくなるようなことが多すぎた。

特に心に残ったのは、黒い雨が染みついている壁や、黒こげになった衣類、溶けた鉄製の柱。そして瓦礫に埋もれた母を助けるために泣き叫んでいる娘の絵。どれもこれもが、私の心の中に深く深く突き刺さった。また、記念館にあったノートには、世界中の人たちの「二度と戦争をしたくない」という思いがあふれていた。国や時代をこえて、多くの人が同じように感じていると知り、嬉しくなった。午後からの語り部の方の涙も印象に残った。八十年以上経っているのに辛い思いが蘇るほどの体験。でも最後に「悲しむことよりも笑ったほうが苦しくない。」と語った言葉は忘れることができない。

三日目、私達は平和式典に参列した。そこには、天皇陛下も臨席されていた。私は、広島市長の平和宣言を今でも覚えている。世界にはたくさんの核兵器があり、それを悪用してはいけない。世界のあちこちで紛争や戦争が広がっている。こんな時だからこそ被爆国日本としての役割は大きくなっているという話だ。私はその話

を聞いてこう考えた。「争うのではなく、話し合うことが大切だ。そしてお互いを少しずつ理解し、譲り合うことも大切だ。」と。互いの意見を尊重し、世界から核兵器をなくし、平和な世界をつくるために。

そのために、今私たちができることを考え実行することが、今後の平和な世界をつくる一歩である。私も、今回の体験を通して、争うのではなく、互いの意見に耳を傾け、理解し、尊重することで平和を築くことができることを学んだ。そのためにも今私ができることをして未来に繋いでいけるよう頑張っていきたい。

被爆地訪問事業を通して

一九四五年、昭和二〇年、八月六日、午前八時一五分、人類史上初めて、広島に原子爆弾が投下されました。熱線や熱風、放射線などによって当たり前の日常が一瞬にして奪われ、多くの人たちが犠牲になりました。

私は被爆地訪問事業を通して、教科書でしか見たことがない原爆ドームを生で見て、戦争の悲惨さを肌で感じることができました。原爆が投下されたとき、広島にいた人たちはどんな気持ちだったのだろうと思うと、胸が痛くなります。そして、実際に被爆した、宇佐美節子さんによる被爆体験講話を聞き、突然の出来事が、家族や地域の人たちの命を失い、現在に至るまで、後遺症や心の傷が残っていることを知りました。実際に体験したことを聞くことで、当時の悲惨さに加え、被爆した人たちの苦しさがすごく伝わりました。だからこそ、戦争は繰り返してはいけないことだと思います。

最近は、実際に被爆した方々が、年々減ってきているそうです。だから、宇佐美節子さんは、

「この話をたくさんの人に伝えてほしい。」

とおっしゃっていました。戦争を風化させないために、私たちが体験したことを多くの人に伝えていく必要があると思います。

今回体験したことは、私にとって貴重なものになりました。そして、戦争は絶対にしてはいけないことだと、改めて強く思いました。世界中では、いまだに戦争が起こっている地域がありますが、「私は関係ない」と考えず、一人ひとりが平和に対する意識を高め、悲しい思いをする人を減らすために、平和を世界に発信していくことが大切だと思います。いつ、何が起こるか分からないからこそ、一日一日を大事に過ごしていきたいです。

広島訪問に参加し感じたこと

今回私は広島訪問事業に参加し、現地の歴史や平和への取り組み、そしてあの地で起こってしまった原爆に対する人々の思いを、見て、聞いて、肌で感じ取りました。参加する前は、広島について知っていることといえば、原爆が落とされたことや原爆ドームがあることくらいでした。そのため、実際に現地を訪れて見聞きしたことは、今まで知らなかった新しい学びばかりでした。

特に印象に残ったのは、平和記念公園や原爆資料館を訪れたことです。資料館には、被害を受けた人々の写真や遺品などが展示されていました。遺された品々や当時の様子を伝える資料を目の当たりにし、原爆がいかに多くの人の日常や大切なものを奪っていったかを実感しました。教科書やテレビで見るだけでは分からない、戦争の恐ろしさや悲しさが胸に迫りました。

また、被爆者の宇佐美節子さんのお話を聞く機会もありました。朝に見送った大切な兄が、帰ってきたときには目を疑うような姿になっていたというお話を聞き、とても胸が苦しくなりました。今、私たちが学校に通い、友達と笑い合い、家族と過ごせている日常は、決して当たり前のものではないのだと強く思います。

今回の訪問を通して、平和とはただ戦争がないことだけではなく、毎日の普通の生活を安心して送れることなのだと感じました。現在も世界には戦争が続いている地域があり、核兵器への不安を抱える人や、明日の命さえ保証されない中で暮らしている人がいます。戦争を経験していない私たち世代だからこそ、過去の悲劇を知って忘れずに語り継ぎ、これからの平和について考えていく責任があります。今回学んだことを自分の中だけで終わらせず、周りの人にも伝えていきたいです。

広島訪問を通して感じたこと

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に世界で初めて原子爆弾が投下されました。たった一つの原爆により、三十五万人いた人口のうち、その年の間に十四万人が命を落としました。あれから八十一年が経った今、僕は広島を訪問しました。

今回の訪問を通して僕は、改めて今生きていることの尊さ、そして被爆された方々の思いを学ぶことができました。今回の訪問を通して心に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、被爆体験証言者の宇佐美節子さんのお話です。宇佐美さんは三歳のとき、爆心地から四・一キロメートル離れた自宅の縁側で被爆されました。その中でも、僕が特に心に残った話があります。宇佐美さんの兄である正治さんが投下当日の夜に家に帰ってきたそうなのですが、その姿は、朝送り出したときとはまるで違っていたそうです。

僕はその話を聴いたとき、強い衝撃を受けました。もし僕が、いつもと変わり映えのない朝、当たり前のように送り出した家族が、夜になって全く別人のような姿で帰ってきたら、どのような気持ちになるだろう。きっと言葉では表せないほどの悲しみや恐怖を感じると思います。

宇佐美さんは終始声を震わせながら自分が体験したことを話してくださいました。その中でも、特に「平和は自分たちで創るもの」という言葉に強く感銘を受けました。実際に被爆された方から直接お話を聴くことで、授業や本を通して学ぶだけでは分からない、その方自身が感じた恐怖や苦しみを、より身近に感じることができました。

二つ目は、平和記念式典での、こども代表による「平和への誓い」での言葉です。その中に、「そこには『生きたかった人々』『生き続けた人々』の思いがあります。」という言葉がありました。

一日目、二日目と被爆された方々の思いや、原爆投下後の現実について学んだうえでこの言葉を聴くと、様々な感情がこみ上げてきました。朝、家を出る前に「いってきます」。夕方、家に帰って来た時に「ただいま」。そんな当たり前の何

気ない会話をしたくても、二度とできなくなってしまった人がたくさんいたのだということを、改めて感じました。

投下から八十一年が経った今、広島は、あのときの出来事が嘘だったかと思うほど発展しており、中国地方の中枢都市となっています、しかしその一方で、言葉では表せないほど悲惨な過去があったことを、僕たちは決して忘れてはいけません。

現在でも世界では、核兵器が使用される危険性がなくなったわけではありません。戦争や原子爆弾は、人と人との信頼やつながりを壊し、多くの悲しみを生み出します。だからこそ、僕たちは歴史から学び、平和の尊さを発信していくことが大切だと考えています。

このような悲劇を二度と繰り返さないために、原爆でなくなった人々の思いを刻み、平和な未来を創るために、今、僕たちにできることを考え続けていきたいです。そして、僕が現地で見て、聴いて、感じた恐ろしさや平和の大切さを、少しでも多くの人に伝えていけるよう、これからも平和について考え、学び続けていきたいです。

気ない会話をしたくても、二度とできなくなってしまった人がたくさんいたのだということを、改めて感じました。

投下から八十一年が経った今、広島は、あのときの出来事が嘘だったかと思うほど発展しており、中国地方の中枢都市となっています、しかしその一方で、言葉では表せないほど悲惨な過去があったことを、僕たちは決して忘れてはいけません。

現在でも世界では、核兵器が使用される危険性がなくなったわけではありません。戦争や原子爆弾は、人と人との信頼やつながりを壊し、多くの悲しみを生み出します。だからこそ、僕たちは歴史から学び、平和の尊さを発信していくことが大切だと考えています。

このような悲劇を二度と繰り返さないために、原爆でなくなった人々の思いを刻み、平和な未来を創るために、今、僕たちにできることを考え続けていきたいです。そして、僕が現地で見て、聴いて、感じた恐ろしさや平和の大切さを、少しでも多くの人に伝えていけるよう、これからも平和について考え、学び続けていきたいです。

広島訪問を通して

これまでの私は、原爆や戦争がどのくらい恐ろしいものなのかを、学校の授業やニュースで得た「知識」として知っているだけでした。

しかし、広島平和記念資料館を訪れ、最初に目に入った『一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えました』という言葉を読み、それが単なる「知識」ではなく「現実」として胸に迫り、ぎゅっと締め付けられるような感覚を覚えました。

特に心に残っているのは、被爆体験証言者である宇佐美節子さんのお話です。今から八十一年前の八月六日、節子さんはわずか三歳と十ヶ月でした。広島に原爆が投下された時、「ピカーッ」と輪郭のない太陽のような光で空が明るくなった瞬間に、「ドーン！」と地面が割れるような音が響いたそうです。ほとんどの建物は崩れ落ち、炎の街となった広島。火傷で皮膚が垂れ下がった人々が「助けて」「水をください」と叫ぶ悲惨な状況でした。近所に住んでいた大好きなお兄さんが被爆し、一晩中うめき苦しみ、亡くなったお話からも、核兵器は無条件で人々を殺してしまうのだと思い、その辛さに心が痛みました。

そして、資料館で見たボロボロの服や黒こげになったお弁当箱、曲がった自転車。それらは、あの日まで、一人ひとりが当たり前の日常を過ごしていた証です。教科書の中の出来事ではなく、本当にここ広島で起きたことであり、多くの尊い命が理不尽に奪われてしまったのだと、戦争の恐ろしさを強く実感しました。

また、グループディスカッションでは、全国から集まった学生たちと「平和を築く行動」について話し合いました。意見をまとめると、相手との対話を大事にし、理解し、思いやり、毎日の感謝を忘れないことが大切だという結論になりました。私ができる具体的な行動を考えてみると、周りの人たちとコミュニケーションをとり、「おはよう」「ありがとう」といった挨拶を大切にすることです。さらに、相手の発言を簡単に否定せず、まずはしっかりと受け止めることだと気づきました。そして、節子さんの「平和とは笑顔でいれること」という言葉を聞き、私は今ここにある当たり前の瞬間を大切にしようと思いました。

今回の広島訪問を通して、戦争や核兵器の恐ろしさだけではなく、平和は与えられるものではなく自分たちで作るものだということ、そして互いを認め合う大切さを学ぶことができました。実際に戦争を体験された被爆者が減っていく中、これからは、ここで経験したり考えたりしたことを私自身が多くの人に伝えていきたいと思いました。

平和をつなぐために

今回私は広島を訪れてたくさんのことを学びました。戦争の悲惨さを平和についてを考えさせられました。

今回の旅の中で、私は特に印象に残っていることがあります。それは、資料館を訪れたことと被爆者である宇佐美節子さんの話を聞いたことです。資料館ではケガを負った人々の実際の写真や、原爆投下後のリアルな街の様子、さらに被爆された方の服や物が展示されていました。それらは本当に生々しく、心に重いものがズシンとのったような感じがして苦しかったです。さらに、小さな子供たちが目の前で泣いているのをみて、より胸が苦しくなりました。亡き子と共に土に埋められサビて歪んだ三輪車、丸焦げになった弁当箱。これらのものたちが戦争の悲惨さを物語っていました。

被爆者である宇佐美節子さんの話は、私が今過ごしている日常では考えられないことばかりでした。いつものように過ごしていたのに、一瞬で平和だった日常が崩れてしまいました。大好きなお兄さんを亡くしてしまったこと、今でも不安が残っていること。本当に辛そうに話していました。どれだけ悲惨なものだったかを考えさせられました。

戦争による被害は当時だけに残るのではありません。今でも被爆者の方々は心と体に深い傷を負っているのです。戦争を過去の出来事にするのではなくもう二度と起こらないようにしなければなりません。また、平和を保っていくために必要なことを考えなければなりません。元気に挨拶をする。ありがとうと言う。何気ない一つ一つの行動も、平和をつくる大切な一歩になるのです。

現在も、この世界のどこかで戦争が続いている状況です。一刻も早く核爆弾をなくし、世界に平和が訪れるように、一人一人が温かな日々を送れるように今回の旅で学んだことを自分だけの経験にせず、たくさんの人に伝え、一日一日を大切に過ごしていきます。

非核化に向けてできること

私が本事業に参加して自分の目で見て体験したことは、ネット上の画像や情報からだけでは感じられない恐怖と残酷さがありました。特に心に残ったことは３つあります。

１つ目は原爆ドーム見学です。建物からは、原爆の威力がひしひしと伝わってきました。原爆ドームの中には、老朽化している原爆ドームを後世に残すためにたくさんの支柱がありました。また、近くの亡くなられた学生方の出身校が書かれた石碑には若松女子校などの会津若松の高校名があり、胸が痛くなりました。

２つ目は平和記念資料館です。そこには、当時の写真や遺品があり、苦しんだ人々の様子が鮮明に表されていました。それらは、非現実的で言葉で言い表せないほど残酷でした。特に当時ケガを負った人たちの写真や亡くなるまで書いた日記などがあり、胸を締め付けられるような気持ちになりました。また、ガイドを通して慰霊碑の形の意味や詳しい歴史などを教えていただきました。改めて、戦争の恐ろしさを肌身で感じることができました。

３つ目は平和記念式典です。高市総理を始めとする方々のお話を聞き、被爆者が減ってきている現状を私たちが非核化に向けて原爆の恐怖を語り継いでいかなければならないということを再認識できました。

私は今回の経験を踏まえて、話し合うことで世界から戦争をなくすことができるのではないかと思いました。そのためには、戦争の悲惨さを語り継ぎ非核三原則を一人ひとりが意識していかなければならないのだと強く思いました。これからも本事業で学んだことを沢山の人に語り継いでいきたいです。